

常高院（お初）と侍女たち、その後…

常高院は「かきおきの事」を記してまもなく、寛永10年（1633）8月27日に江戸で波乱の多い人生を閉じました。享年は66歳。遺体は木曾路を越えて小浜城に運ばれ、常高寺において葬儀が執り行われました。翌年、京極氏は出雲・隠岐へと転封となりますが、常高寺は願いどおり若狭小浜に遺され、京極氏やその後を継いで小浜藩主となった酒井氏からも手厚い保護を受けています。

常高院には身のまわりの諸事を勤めた7人の侍女（小少将^{こしょうしょう}、新太夫^{しんだゆう}など）がおり、侍女たちは常高院が亡くなると落飾し、遺体のお伴をして小浜に帰り、後瀬山^{のちせやま}の麓に庵を結びました。

常高院は、「かきおきの事」の中で、自分の死後も侍女たちに扶持を与え、「寺の下に一所にいえをも御たて候て御おき給い候べく候」と懇願しています。実際に侍女たちのために常高寺尼屋敷（尼寺）が建てられました。京極氏は小浜を離れた後も幕末まで常高寺に扶持を与え、管理のために藩士3名を派遣するなど手厚く保護しました。

ここに暮らした65人の尼僧たちの墓は、現在も常高院の墓を取り囲んで見守っています。



現在の常高寺（山門）



常高院の墓所